

在宅で一人暮らしをする高齢者の ACP に関する認識

研究代表者 辻原 千晶（ベルアンサンプル訪問看護ステーション 看護師）

共同研究者 吉行 紀子（大阪市立大学大学院看護学研究科在宅看護学領域 研究員）

研究要旨

目的：在宅で一人暮らしをする高齢者の ACP に関する認識を明らかにし、今後の支援への示唆を得る事を目的とした。

方法：研究参加者は、A訪問看護ステーションの状態が安定しており、家族のいる一人暮らし高齢者で、本研究の趣旨を理解し、研究協力への同意が得られた9名である。方法は、質的記述的研究であり、インタビューガイドを用いた半構造化面接によりデータを収集し分析した。本研究はベルアンサンプル権利・倫理委員会の承認を得て実施した。

結果：9名の逐語録から214のコードが得られ、分析結果より9のカテゴリー、29のサブカテゴリーが抽出された。文中の【 】はカテゴリー、< >はサブカテゴリーを示す。本研究の一人暮らし高齢者は、<年齢から ACP を意識>し【必要な事だと自覚】していた。また、<孤独死の可能性を考える><死後の準備をしている>等、【死について考え話をする】ことがみられた。また、<自分の病気体験>からもしもの時を考え、<家族との死別をきっかけに話をする>機会を持つなど、【自己や周囲の病気・死別体験が ACP を考えるきっかけとなる】ことが表された。話し合いのあり方として、【話す相手を選んで相談する】が、<話す機会がない><話そうとすると周囲が遮断する>等【ACP の話し合いに対する周囲の準備が出来ていない】。また、<家族に負担をかけたくない><家族の意見に従う>等【自分がどうしたいかより家族の意見を優先する】などがみられた。さらに、【認知症や寝たきりになると一人暮らしは出来なくなる】と危惧しているが、【成りに任せる】と考えており、ACP については<嫌なこと><悲しいこと>と認識し【考えることを避ける】なども表された。

結論：在宅で一人暮らしをする高齢者は、死や今後のリスクに関する話をしていたが、具体的に話し合う機会はなく、家族の意見を優先し、成りに任せるという認識がみられた。今後はさらなる ACP の普及活動を行うとともに、認知症や寝たきり、孤独死など、一人暮らしの不安を見据えた話し合いが必要である。

Key Words：在宅、一人暮らし高齢者、ACP